リアルフィクション

j

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアルフィクション

【Ｎコード】

Ｎ９６３１Ｆ

【作者名】

ｊ

【あらすじ】

現実にありそうで現実にない冒険ストーリー。リニアとランフリーが出会って運命が変わる。今から１００００００年後、主人公リニアの親が生き物達を絶滅させてしまう。しかし、その生き物達を生き返らせるため、リニアは旅にでる。

探すべき道。

人間てのはおかしなもんでさ、自分の前に道は存在しないのに、その道探そうとする奴と、探しもしないで諦める奴の二種類に分けられてる。

でも、その中間の奴が居たらどうする？
諦めてるけど探してる奴。

まぁそんな奴居たら楽しくてしょうがないだろうね。

～１００００００年～

生き物が絶滅してから、もう一週間もたつ。

そんな中で、人間はどうどうと生きてる。

その中の人間には、自分が生きてる事に罪悪感を持つ少年【リニア】が居た。１６歳ぐらいの少年。

リニアの親は、生き物を絶滅させた人間の一人。

生き物を絶滅させた父と母の背中見ながら、リニアは呟いていた。

「俺は・・・犯罪者の子供なんかじゃない。」

その言葉を何回も何回も呟いていた。

ある日、ついにリニアは両親に自分の思いを伝えた。

「俺は、生き物を絶滅させたくなんかなかった！なのに、なんで父さんと母さんは生き物達を殺したんだ！？」

父親はリニアのそばに行き、耳元でささやいた。

「人間が生きるためだ。生き物など、またニ、三年すれば生まれるさ。
生きるため、生きるためにやった事だ。他に道はなかったんだ。」

「父さん達は、諦めて、別の道を探そうともしなかったじゃないか！」

「これしか方法がなかったからだ。

今の生き物達は人間の５０倍近くの酸素を吸うんだ。
すると、人間達は酸素がなくなり死んでしまうんだ。」

「俺は必ず生き物達を生き返らせる。また新たな命が産まれるようにしてみせる！
俺はもう、犯罪者の子供にはならない。」

そう言うと、リニアは家を飛び出した。

「俺は・・・俺は・・・。」

そう言いながら歩いていると前から、女の子が声をかけてきた。

「ねー、オレオレくん、なんでこの街には生き物がいないの？」

「この街の生き物達は、すべて大人達が殺したんだ！」

リニアは力が入ってしまい、どこかに走り出した。

「ちょっとー！
オレオレくーん！」

リニアはハッとして、ようやく落ち着いて歩き出すと、後ろからまたさっきの女の子が追い掛けてきた。

「オレオレくーん。」

「俺の事？その、オレオレくんとか言うの。」

「うん。ダメ？」

「なんか変だから、俺の事は、リニアって呼んで。
でさ、どうしたの？この街に買い物？」

「うん。私はランフリー。
えっとね、実は私の街でも生き物が絶滅したの。誰がやったかは、わからない。それで、皆悩んでたら、一つ、あるうわさを聞いたの。この世界のどこかに、命をなくしたものを生き返らせる薬があるらしいの。それで探してるんだけどぜんぜんダメ。んで、もしかして、道具屋に売ってるかもって思ってこの街に来たの。」

「なぁランフリー、俺も一緒にその薬を探してもいい・・・か？」

「いいよ！一緒に生き物達を生き返らせよう！」

「おう！
でも、この街にはそんな薬ねぇよ。あったとしても、この街の奴らが多分どこかに隠すな。ところでその薬の名前は？」

「ロストバって言う名前よ。」

「ロストバかぁ・・・。聞いた事ないなぁ。」

「うーん。リニアも知らないんだぁ・・・。」

「ランフリー、とりあえず、この街から南に向かうとコールディアって言う街があるんだ。まずそこに向かおう。」

そして二人はコールディアに向かった。

犯罪者。

二人はコールディアに向かう途中、大人達の事について語っていた。

「なぁ、ランフリー、自分の両親好きか？」

「私は・・・私の手で両親を殺したの。だから、好きでも嫌いでもないの。分からないから、親の温もりとか。」

「あ・・・ランフリー、ごめん。
俺・・・。」

「えっ、ぜんぜん大丈夫だよ。それより、リニアは両親好きなの？」

「俺は、嫌いだ。両親も大人も大嫌いだ！
大人は全員犯罪者だ。」

「でも、なんで？」

「あいつらが生き物を殺したんだ。
俺は見たんだ。」

「リニアは目で見えてる事しか信じないの？
その人達の事情とかも考えないで、自分の意見だけで、犯罪者とか言っていいの？」

「・・・・・・。」

そのまま二人、無言で歩き続けていると、ランフリーが突然、前を指差しながら大きな声を出した。

「リニア！！
あれがコールディアじゃない！？」

「え？」

リニアがランフリーの指差している方向を見ると、すごく大きくて綺麗で全体が空色の街が見えてきた。

「ついに・・・コールディアに来れたな。ランフリー。」

「うん！！早く行こっ！！」

～コールディア～

「ここが、コールディア。
オルゴールの音色が素敵ね、リニア。」

「そりゃ、オルゴールの街だからな。
世界一のオルゴールがコールディアにはそろってるんだ。」

「ここなら薬があるかも！！」

「じゃあさっそく、道具屋にいくぞ！！」

道具屋へリニアとランフリーが走って行くと、店の人とあらそってる17歳ぐらいの男の子が居た。

「薬がないだと！？
ふざけんな！！テメェ、どっかに隠してるんじゃねえだろうな！？」

「無い物は仕方ないだろう！！
だから何回、言わせるんだ！？
どこからか来た男性一人、女性一人が買いしめたと。」

それを聞いてリニアはそこに走って行った。

「おい、おじさん！男と女が来た時、絶滅がなんとか、とか言ってなかったか！？」

「あー、そう言えば絶滅させたのに生き返らされたら困るとか・・・。」

「くっ・・・犯罪者共が・・・くそっ！！」

「リニア、それって・・・両親？」

「ああ、そうだ。
ランフリー、俺の街に戻ろう。」

「う、うん。」

リニアは、ランフリーを連れてコールディアを出た。

その場面を見ていた男の子は呟いた。

「なんだ？
あいつら。」

その頃、リニアとランフリーはリニアの街に着いてすぐに両親の所に行った。

「父さん！！母さん！！」

「リ、リニア・・・。」

「あ、ああ、こ、こんなことになるなんて・・・・。」

「父さん？」

「もう、生き物達が生き返る事はない。
例え、薬を使っても。」

「な、なんだって！？そんなに・・・自分達が大事なのか！？
自分達の為なら生き物達も殺すのか！？」

「ちょっとリニア、やめなさいよ。」

ランフリーが止めに入ったが、リニアはそんな事聞こうともしなかった。

「答えろよ！！
人間のかってな都合で生き物達は殺されるのかよ！？」

「リニア！やめなさいってば！！
私にはリニアの優しさが、想いがわかるよ。でも、そこまで自分の親を犯罪者扱いする必要ないでしょ！？」

「おじょうさん、いいのです。
僕達が、生き物達を絶滅させたのですから。だから僕達は、最初からこうしてればよかった・・・。」

リニアの両親はナイフを持って自分の腹に軽く当てた。

「リニア、すまなかった・・・。
本当にすまなかった。」

「リニア、ごめんなさいね。
お母さん、リニアに何もしてあげられなかった。

しかも、こんな逃げるような事してごめんなさい。」

そしてとうとう、二人はナイフを腹に突き刺してしまった。

「父さん！！
母さん！！
まだ・・・まだ父さんと母さんには生き物を生き返らせる役がある
だろぉ！！
なんで死んじまうんだよぉぉぉぉ！？」

リニアは両目に涙をためて、両親の所に行こうとした。
しかし、それをランフリーが止めた。

「リニア、行っちゃだめよ！
そしたら、あなたまで死んでしまう。」

「俺が・・・父さんと母さんを・・・。」

すると突然、どこかで聞いた男の子の声がした。

「そうだな、お前が両親を殺したんだな。
お前も・・・犯罪者だな。」

「あなた、道具屋に居た人ね！？
なんでそうゆう事言うの！？」

リニアは下を向いた。

「いいよ、ランフリー。俺は、もう犯罪者だからさ。」

悲惨。

しかし、道具屋に居た男は言った。

「でも、俺は両親を生き返らせる方法知ってるぜ。
知りたいか？」

リニアは、目を大きく開いて男の方に駆け寄った。

「知ってるのか！？
お、教えてくれ！」

「生き物を生き返らせる薬だ。
人間だって生き物だからな。」

「そおか・・・。」

「でも、テメェもわかっただろ。
今まで普通に生きててそばにいた奴が、消えていく悲しみが。」

「ああ、わかった。」

「俺は、お前以上に悲惨な経験をしているんだ。
だから、絶対に生き物を生き返らせる薬、【ロストバ】を手にいれるんだ。」

ランフリーは、恐る恐る聞いた。

「ひ、悲惨な・・・経験？」

「・・・。
俺には、婚約者が居たんだよ。
大好きだった。
愛しくて、愛しくて。でも、結婚前夜、俺の婚約者は、誰かに連れ去られて、殺されてた。」

「なんて・・・酷い事を・・・。」

「その犯人は、殺すだけじゃ物足りなかったのか、指輪を奪って行ったんだ。
俺は許せなかった。
憎くて、憎くて。
でもその犯人はもう、見つけられない。」

リニアは、下を向きながら呟いた。

「その犯人を探す前から見つからないって諦めてたら、運命は変わらない・・・。」

男に少し笑顔が戻った。

「そうかもな。
俺が今、出来るのは、薬とその犯人を探す事だな。
・・・運命・・・か。」

「俺も、君と一緒に行くよ。
犯人と薬を探そう。」

「おう！
俺の名前は、カイロだ。よろしくな、リニア、ランフリー。」

ランフリーはどこか焦ったように言った。
「カ、カイ・・・ロ？」

不思議そうにカイロは聞いた。

「おい、ランフリー？どうしたんだ？」

その時、ランフリーは泣きながら答えた。

「カ、カイロ・・・、ご、ごめん。
あなたの婚約者、殺したの・・・、わ、私かもしれない。」

カイロは驚いた。

「なっ、なんでだよ！？
どうゆう事だよ！？」

「わ、私、どこかの記憶がないの・・・。
それで私の一部の記憶で、私の前に女の人が倒れてて、カイロってずっと血だらけで呟いていたの。」

カイロは絶望した。

「・・・うそだ。
違う。違う。違う。」

「私かもしれないの。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

」

「俺は信じねぇ。
信じたくねぇ。」

「私が・・・殺した・・・の。」

カイロは、まっすぐランフリーを見て言った。

「俺はまだ、信じない。
薬を手に入れて、生き返らせて、それから犯人が誰だか聞く。
それまでは、ランフリーを犯人とは思わないからな。」

「カイロ・・・。
ありがとう。」

リニアは、出来るだけ明るく言った。

「じゃあ、探しに行こうよ。」

ランフリーは言った。

「でも私、旅をしてる間に二人を殺してしまうかもしれない。
実際、私は両親もカイロの婚約者も殺している。
それでも、ついていっていいの？」

リニアは優しく言った。

「いいんだよ。
まぁ、ランフリーがついて来たくないって言うなら別だけど・・・・
な？」

ランフリーは喜びながら微笑んだ。

「行くよ。
ずっとずっと、二人についていく。」

カイロはまた真面目な顔に戻って言った。

「よし、じゃあ次はどこに行くんだ？
コールディアにはもうねぇし・・・・。」

リニアは言った。

「うーん。
とりあえず、この街を出て歩こう。」

そして三人で街を出て歩き出した。

そしてふと、ランフリーは言った。

「はやく薬を手に入れて、大切な人を生き返らせたいね。」

すると突然、どこからか女性の声が聞こえて来た。

「大切な人を生き返らせるぅー？
何言ってんの？
あんたら。」

「なっ、何！？
誰よ！？」

「ふん。
死んでる奴を生き返らせるなんてさ。
死んだ奴は死んでればいいのよ。

そしていつか、生きてる奴は死ねばいい。」

リニアは、その女を睨みつけた。

「なんてこと言うんだ！？
おばさん！！」

「私はまだ１８だバカ野郎！！
まぁ、そんな事はどうでもいい。
・・・薬を渡せ。」

昔話し。

ランフリーは言った。

「私達は薬は持ってないわ！！」

女は言った。

「・・・そう。
そこまで隠すのね。
いいわ。力ずくでも奪ってあげる。
来る奴は来なさい。
降伏したければ、薬を渡して死になさい。」

「なんで貴方はそこまで死ねって言えるの！？」

「・・・人間が嫌いなだけよ・・・。」

リニアは言った。

「どうして人間が嫌いなんだ？」

女は言った。

「あのお方以外は嫌いだ！！
人間は、あのお方の命令を、忠告を無視して・・・。無視までしといて、殺すなんて・・・。」

カイロは訪ねた。

「あのお方？
そいつも人間だろ？」

女は言った。

「今は・・・違う。
昔だって人間じゃなかった。
あのお方は今、死んで、人間が言う、幽霊と言う物になって、屋敷にいる。
昔は、私と同じ、人間の姿をした、獣（けもの）だった。
つまり、人神（じんじゅう）。」

ランフリーは訪ねた。

「貴方も・・・人神(じんじゅう)なの・・・ね？」

「そう。それで、人神(じんじゅう)は長生きでさ、春、夏、秋、冬、ずっとあのお方と楽しく過ごしていたの。
何年も、何年も、ずっと楽しく・・・。
でも、人間が私からその幸せを奪ったの。」

ランフリーは訪ねた。

「その、人間は・・・誰なの？」

「ガルシルと、アマニア。
そいつらが、生き物を絶望させなければ、きっとあのお方は今も・・・。」

リニアは、目を見開いて言った。

「父さんと・・・母さんの・・・名前。」

女はリニアの方へ行った。

「お前もそいつらの子供なら、犯罪者同然だ！あのお方を返せ！！」

「お、俺も・・・犯・・・罪者。」

「そうだ！！！
あのお方を返せ！！！」

すると、どこからか、聞いた事のない男の声が響いてきた。

「やめなさい。
アシュラン。」

「ショウド様！！」

響いてきた声は、女が、あのお方と言っていた人だった。
そして、女の名前は【アシュラン】あのお方の名前は【ショウド】だった。

「ショウド様！！
なぜですか！？
なぜその男をかばうのですか！？」

「アシュラン。わたしは、人間を怨んだりしてはいない。もちろん、ガルシルとアマニアもだ。」

「なぜですか！？
ショウド様を殺した奴らですよ！！
憎いじゃないですか！！」

「アシュラン、憎しみを持ってはいけない。」

「しかし、人間は弱いです！！
だから、すぐに死ぬ生き物です！！
憎しみを持ってはいけないと言うのならば、せめて敵討ちを！！」

「そう。
人間は弱い。
だから、人神（じんじゅう）が、人間を守り、正しい道へ導くべきなのだ。」

そこに、ランフリーが口を出した。

「あの、ショウドさんの言っている事は正しいと思います。
でも・・・何が正しい道で何が正しくない道かを決めるのは自分自身です。

自分しかそれは決められない。
だから、人神(じんじゅう)さん達と人間は、仲間って事のが正しいと私は思います。
守るもの、守られるものではなく、仲間同士として、人間と向き合えばいいのじゃないですか？」

ショウドは微笑んだ。

「賢さなら、　人神(じんじゅう)より人間の方が上のようだな、アシュラン。」

「そう・・・ですね。ショウド様・・・。」

ショウドはリニアにちかずいた。

「先程は、アシュランが君に対して失礼な事を言った事を許してほしい。
すまなかった。
わたしは、君の両親に殺されてよかったと思っている。」

「いえ、大丈夫です。
でも・・・どうして、よかったと思ってるんですか？」

「生まれ変われた気がするんだ。

新しい自分に。
だから、もし、薬を見つけて生き返ったら、新しい自分を探そうと思う。」

アシュランは言った。

「ショウド様、その時も、私がお供致します。」

一期一会。

「ああ、よろしく頼む、アシュラン。」

「はい、ショウド様。」

カイロは言った。

「よかったな。
おいアシュラン、お前もう、人間が嫌いとか、死ねとか言わねぇ方がいいぞ？
そうゆうもんは、心で思うもんだ。」

アシュランは言った。

「わかったよ。
ショウド様の為に。

じゃあ、私達は私達なりに薬を探すわ。
さらば。」

ショウドも軽く微笑み、言った。

「カイロ、ランフリー、そしてリニアよ、またどこかで会おう。」

リニアは言った。

「アシュラン、ショウドさん、俺らさ、きっとまた会えるよな。」

ショウドは言った。

「当たり前じゃないか。
きっと、また会えるさ。」

「そう・・・だよな！じゃあ、また、アシュラン、ショウドさん！」

そして、リニア達は、ショウドとアシュランと別れた。

リニアは呟いた。

「アシュランは、すげぇ奴だったよな。

自分を犠牲にしてまでショウドさんを守るだなんてさ。」

カイロは言った。

「あぁ、あいつはすげぇ奴だったよ。
俺がアシュランの立場だったら、守るべき人を守ってやれたかな・・・？」

リニアは言った。

「守ってやれたかな、じゃなくて、守るんだろ。」

カイロは言った。

「でも、今は・・・
まぁ、しょうがねぇよな。」

リニアは言った。

「しょうがないなんて言葉でかたずけちゃ駄目だ。
自分を・・・信じてみな？」

カイロは上を向いて、両手を太陽に向けてあげた。

「・・・アイツ、今、何してんだろ。
笑ってんのかな。
それとも、泣いてんのかな。
笑ってたら・・・いいのにな。」

リニアは微笑みながら言った。

「待ちくたびれてると思うぜ。
はやく結婚したいよー。
みたいなさ。
カイロがむかえに来るの待ってるんだよ。きっと。」

カイロも微笑んだ。

「俺だって、はやく結婚してぇよ。」

ただ、ランフリーは一人、下を向き、歩き出そうとした瞬間。

《ドンッ！！》

「わっ！！」

ランフリーは、メガネをかけてるかっこいい17歳ぐらいの男の子とぶつかった。

男の子は、座り込んでいるランフリーに声をかけた。

「ねぇ、大丈夫ー？
ごめんねぇー？
俺、【サン】って言うんだけど、キミはー？」

「わ、私は、ランフリー。
私なら、大丈夫だよ、サン。
ありがとう。」

男は微笑んだ。

「ランフリーか、可愛い名前だねー。
ねぇ、ランフリー、ぶつかっちゃったおわびしたいんだけどー？」

「おわびなんていいよー！

大丈夫だから。
ぜんぜん、気をつかわないで！」

二人のどこか楽しげな話しを聞いていたリニアは、心がもやもやして、ランフリーに話しかけた。

「ランフリー！
も、もう行こうぜ！」

「あっ、うん！
じゃあね！サン！」

そんな時、カイロは顔をしかめていた。
ランフリーはカイロに聞いた。

「どうしたの？
カイロ。」

その時、サンは少し目を細めて呟いた。

「ふーん。
こいつがカイロかー。」

そして、カイロも言った。

「あぁ、なんだか、胸騒ぎがして・・・な。」

サンは突然、二人の話に入ってきた。

終わりの時。（前書き）

適当に終わらせてしまってすいません（汗

終わりの時。

「ねぇー、話に入って悪いんだけどー、俺ー、ランフリーを連れていきたくなっちゃったー。駄目ー？」

ランフリーは焦った。

「サン、何言ってんのっ！？」

サンは微笑みを浮かべた。

「大丈夫。俺、強いし。ランフリーを守れるからー。ここにいる二人より、絶対俺といた方がいいよー。」

ランフリーより先に、カイロがサンに言い返した。

「テメェなんかにランフリーを守ってもらうより、俺と、リニアが守った方が強いし、ランフリーが困ってんじゃねーか！！」

サンは冷たく言い返した。

「婚約者たった一人も守れなかったくせに、よく言えるよねー？」

カイロは驚き、聞き返した。

「なっ、なんで、お前が、その事知ってんだよ！？」

サンは目を細めて微笑んだ。

「えー？
なんでって・・・俺が殺したからに決まってるだろぉー？」

カイロは目を見開いた。

「ふざけんな！！
冗談言ってんじゃねぇよ！！」

サンは高笑いをあげた。

「く・・・くく、くはははははっー！！
信じられないのー？
俺さ、人獣(じんじゅう)もさっき二匹殺しちゃったんだよねぇー。知り合い？」

ランフリーは言った。

「アシュランと、ショウドさんの・・・事！？」

サンは言った。

「まぁ、そんな事はどうでもいいやー。
ねぇーランフリー、俺とついて来ないー？？大丈夫ー。一人目みたいに殺さないからさー。」

ランフリーは強くこばんだ。

「絶対に・・・嫌。
サン、そんな人だなんて思わなかった・・・。
なんでカイロの婚約者を殺したの！？
それに、アシュランと、ショウドさんも！！」

サンは言った。

「一人目はー、なんかー、気分的にムカついてたからでー、人獣(じんじゅう)はー、俺が一番嫌いな種族だからー。
でも、ランフリーは好きだよー。」

ランフリーは言った。

「ひどい・・・。
ひどすぎるよ!!
でも私・・・サンを救ってあげたい。」

カイロは驚いた。

「ランフリー!?何言ってんだよ!?」

リニアも言った。

「ランフリーまさか、お前、サンについていく気かっ!?」

ランフリーも言い返した。

「うん、そうだよ。

私が、サンを救うの。今まで、ありがと。
・・・ごめんなさい。」

サンは微笑んだ。

「ランフリー、ありがとー。
でもさ・・・バカだよね。」

《ズブッ！！》

サンが言葉をはっした瞬間、ランフリーの腹に何かが突き刺さった。

リニアは叫んだ。

「ランフリ――――――――――――！！！！！」

ランフリーの腹に突き刺さったものは、刃が鋭いナイフだった。

サンはランフリーに言った。

「ランフリー、本気で好きだったよ。
でもね、愛しいから、殺したの。
殺すほど、愛しかったから。
誰にも、ランフリーは渡さない。
これでランフリーは誰にも奪えなくなった。永遠に、俺の、俺だけのランフリーだよ。」

ランフリーはだんだん、目がかすれてきていた。

「う、うぅ、ひ、ひど・・・い・・・よ、サ・・・ン。」

「大丈夫。
ランフリー。愛しているよ。永遠に、俺だけのランフリー。」

リニアは怒り狂ったかのようにサンに怒鳴りつけた。

「何すんだよお前――――――――!!!!!」

サンは言った。

「そんなに怒んなよ。俺さー、本気でランフリーが好きなんだよね。

だから、もうランフリーは俺のもの。
誰にも渡さないよ。」

カイロは言った。

「さぁ？
どうだろうな？
ランフリーは、本当にお前のものになったのかな？」サンは戸惑い、
ランフリーの方向を見るとランフリーは何もなかったかのようにたっていた。

「なっ、なんでランフリー、たっているんだ！？」

ランフリーは、微笑むと、サンにナイフを突き刺さした。

「サンのものになりたくなかったから、死んでないんだよ。」

サンは倒れて、息耐えた。
見ると、生きかえらせる薬、【ロストバ】があった。

そして、皆でそれを分けて、帰りました。

終わりー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9631f/

リアルフィクション

2010年10月28日08時55分発行